

2025年度東京藝術大学大学院映像研究科
修士課程<メディア映像専攻>
第1次合格者発表

| 受験番号 | 受験番号 | 受験番号 |
|------|-------|------|
| 4 | 41 | |
| 5 | 42 | |
| 7 | 43 | |
| 10 | 44 | |
| 11 | 49 | |
| 12 | 51 | |
| 13 | 53 | |
| 15 | 56 | |
| 18 | 57 | |
| 20 | 58 | |
| 22 | 59 | |
| 26 | 68 | |
| 31 | 69 | |
| 32 | 以上30名 | |
| 35 | | |
| 37 | | |
| 40 | | |

メディア映像専攻 第2次試験 [課題提出・筆記試験・口述試験]

| | 提出期間・試験日 | 詳細 | | | | |
|---------------------|--------------------------------------|----------------------------|--|------|----|--|
| 課題提出 (ビデオによる提出) | 2月17日(月) 10:00から | 提出方法 | 本学が指定するURLにアップロードすること。詳細は、本学から第1次合格者宛に送信するメール上に記載する。 | | | |
| | 2月18日(火) 23:59まで | 「課題」の入手方法 | 次のページ以降を確認すること。 | | | |
| 筆記試験 (英語を含む教養試験) | 2月20日(木) | 集合時刻 (会場入場開始時刻) | 12:30 ※同時刻まで入場できません | | | |
| | | 集合場所 | 万国橋会議センター4階 | | | |
| | | 試験時間 | 13:00~14:00 | | | |
| 口述試験 | 2月21日(金) | 集合時刻 | 13:20 | 受験番号 | | |
| | | | 4 | 5 | 7 | |
| | | | 14:00 | 受験番号 | | |
| | | | 10 | 11 | 12 | |
| | | | 15:10 | 受験番号 | | |
| | | | 13 | 15 | 18 | |
| | 15:50 | 受験番号 | | | | |
| | 20 | 22 | 26 | | | |
| | 16:50 | 受験番号 | | | | |
| | 31 | 32 | 35 | | | |
| | 17:30 | 受験番号 | | | | |
| | 37 | 40 | 41 | | | |
| | 集合場所 | 大学院映像研究科 元町中華街校舎 1階 | | | | |
| 注意事項 | 集合時刻は受験番号ごとに異なる。 指定した集合時刻に遅れないこと。 | | | | | |
| 2月22日(土) | 集合時刻 | 13:20 | 受験番号 | | | |
| | | 42 | 43 | 44 | | |
| | | 14:00 | 受験番号 | | | |
| | | 49 | 51 | 53 | | |
| | | 15:10 | 受験番号 | | | |
| | | 56 | 57 | 58 | | |
| 15:50 | 受験番号 | | | | | |
| 59 | 68 | 69 | | | | |
| 集合場所 | 大学院映像研究科 元町中華街校舎 1階 | | | | | |
| 注意事項 | 集合時刻は受験番号ごとに異なる。 指定した集合時刻に遅れないこと。 | | | | | |

その他「学生募集要項」参照のこと

2025 年度

東京藝術大学大学院映像研究科 メディア映像専攻 修士課程入学試験

第 2 次試験 [課題]

次のテキストをモチーフとして
あなたなりの映像を作ってください。

- ・ 青柳菜摘 「san kaku no suki ma」

※ 編集上の注意

- ・ 本編の長さは 3 分以内。
- ・ 冒頭に黒みと、受験番号、氏名、テキストのタイトルを入れてください。

※ 提出について

- ・ 提出方法は、個別にメールにて連絡します。
 - ※ 2月7日(金)までにメールが届かない場合は、大学院映像研究科教務係に問い合わせてください。
- ・ 映像データの他に、以下の事項を A4 用紙 1 枚に収まるよう記載した PDF (1MB 以下) を提出してください。
 - 1) 受験番号、氏名
 - 2) 制作に関わった協力者とその役割を正確に記述してください。

以上

一・余震

san kaku no suki ma からずっと出られないままぼくは何日何十日何百年忘れてしまうほど引きこもって、外、ばかり考えていた。こうこうこう、こうこうこう、こうこうこう、こうこうこう、火は絶えることなく燃えさかる。外はまばゆい。ということを知ったのもベッドに持ち込んだ七インチネットブックの窓のなかでぼくが存在するこの場所の外の外の外の外またまた外の外の外、の状況が「カメラ」によっていつだってたとえぼくが死んでしまったそのときでさえ映し出される。画面に映っているのはいつだってその、ぼくかもしれないのだ。こんな自己意識過剰なぼくは絶対に画面になんて映らないよ。映らない確率の方が高い。でもどれだけ時間がたったとしても一分後がどうなってるかはいつまでたってもわからない。映すものがぼくしなくなってしまうことだってある。きっと、画面のなかのぼくがぼくであるとぼくは気づけない。実際気がつかなかった。小さな画面に映った足の小指ほどにも満たないぼくに名前を付けてくれる人なんていない。こびと、あいつ、ちび、やから、ぼうや、ぼく、と頭の中で理解した視聴者たちにとっては画面に映り込んだ画像の一部分でしかない。気づくかどうかすら怪しい。あの画像の一ピクセルにみんな名前なんてない。それでもどこかでこの画像が「だれ」であるか気づいてしまって名前をつけて見知った「あのこ」だと信じる。ピクセルは異なる意味を持つ。もし全部がぼくだったらこの場所から出ていってそれはぼくだ、と言おう、ちゃんと。ぼくだ！ それだけがいまぼくのできるぼくの示し方だ。でも、でも出てって、どこに、言えばいい？ そこにいるのはだれなのか？ ここからインターネットを伝って動画を伝って言ったほうが「伝わる」んじゃないかな。そうじゃなかったら、なにもない空間のなかでどうしたらいいんだ。ネットブックからかすかに聞こえるささやき声は音量を上げたら怒鳴り声になる。ニュースキヤスターが声を荒げる。音量を上げたからか？ 冷静でいなくてはいけなときそのときまさに冷静でいられる瞬間、冷静さよりも伝えたい状況が目の前にある、私の目の前にも、キャスターの目の前にも。3.11の速度が遅くて落ちる解像度とともに有機的な赤い火、光が、暗闇のブロックと灯ったブロックのピクセルがモザイクのように発光してぼくの顔をうつくしく照

らした、ゆらめきのぶん、瞳は水色にきらめく。あなたに会いたいなんて考えてなかった。思い出したときにはもうすでに「あなた」の顔を思い浮かべていた。あれからぼくは san kaku no sukki ma にいるけど、少しだけあなたに会って。会ったら、なんて言えればいい？ わかんない、けどきつと、あなた、ぼくにこう言うだろう。「行かないで」って。今日は、あれから三日目。

二・通信兵

ぼくは昔のことがわからない。祖父母から聞く昔話もぴんどこない。だから忠実に、写真的に、具体的に書かないといけなくて昔のことははっきりと書く。一日目、ぼくは十二歳で通信兵を志願した。このまま戦い続ける「ニホン」にいて、ずうつと、いつものように、朝昼夕飯を食べて日が落ちたら暗闇に寝て、なんてことしてはいけないように感じていた。早起きして最低限の食料で、休まずこのために尽くし、日が昇るまで目が利かないかモールス信号を指が覚え、最低限の睡眠で、そういうなかに生きてくって決意をしないと罪悪感に苛まれてどうしようもなかった。ママは、どうしてぼくをまもるんだ。どうしてここをまもらないのか。どうしてまもられてしまうんだぼくは。防空壕をくだってくだって、この san kaku no sukki ma に入ってからずっとここにいて。ぼくは、なぜママをまもれないのか。「行かないで」とママはいう。おなじ人間は、戦地に撃たれ死んでいて。ぼくはどうしていかないのか。防空壕に隠れて生き残ったら、なにをする。ぼくは、さなかにいたと言えるのか。ぼくにある時間はつぎの瞬間死んでしまった。ぼくの時間はもっと十分使われるべきだった。それから学校に入って通信兵になるべく勉強をした。物覚えはよかった。マイクラやってたからプログラミングの授業は他の子よりよくできた。二年で卒業し、すぐ南方へ行くことになった。部隊にはまだ小学生にも見えるぶかぶかの軍服を着た小さな子や、顔だけ子供で背はひよろ長いやつ、ぼくが知ってる軍隊とはほど遠い見た目だったし、軍事訓練をほとんど受けてないからかこれからする予定もないからか背格好はだれがみても頼りなかった。周りの兵隊たちも不思議な目をして隊列を見た。早く、早く行きたいと願った。いまぼくがどこにいいのか気になった。絶対にわからないとわかっているのにずっと気になっていた。わかっ飛ばしてしまえば志願なんてしなかったし死ぬこともなかったし二〇一七年も生きていた。そこそこ体も丈夫で長生きもした。子供もいて孫もいた。ぼくが嫌だった、朝昼夕飯を食べて日が落ちたら早く寝て起きてベランダに出るとカラスがちょうどこちらを向いて手に持っていたビーフジャーキーを力なく投げると重たげに飛び立ったカラスは一回転して地面すれすれでジャーキーをキャッチをしてどこかへ飛んでいった。昨日干した洗濯物はいまもそのままになっている。

そっちからこっちは見える？ 東京に来てから何年も経って二度目の新品の制服を着ることになった。今度はぶかぶかじゃなくちようどよいサイズでよかった。あんなに大きい制服も三年したらちようどよくなるなんて十二歳のぼくにはわからなかった。まだこっちは余震が続いていて毎日夢で地震はくる。寝ているあいだの余震が夢で本震になってしまってるのかもしれない。あるときはビーチで、日本のビーチで、海に入ろうとしたその瞬間、海が真っ赤に発光して、雷が落ちたと思ったら地鳴りで、あたり一面の砂が振動した。ぼくとあなたは急いで海の家、海にあった仮設の小屋に入って、流木製の扉を固く閉じた。バラックは今までより大きかった。南方にある島へ辿り着いて、すぐに通信隊で通信機器の設置をした。ぼくは海外と交信する部隊に配属され、セッティングを終えた機器に張り付いてヘッドフォンを被った瞬間から信号を聞き逃さないようにした。敵に気づかれないよう受信し送信する。受信し送信する。七インチのモニターだけがバラックの外、海小屋の、防空壕の、爆風で倒れられたタンスが壁とのあいだに作った san kaku no suki ma の外と、ぼくをつなぐ。熱線が来ようと雨が降ろうとびくともしない san kaku no suki ma からちいさなぼくは信号を受信し続ける。信号にぼくがいる。あなたもいる。「行かないで」はどこからどこへのことだろうか。ここから見える窓は七インチ。すぐ飛び出していける大きさだけど外に、黒い飛行機が見える。小さな飛行機、乗組員の気配はしない、バラックは息を潜める、部隊は息を止めている、マラリア蚊と山ヒルがおいしそうに血をすする音がした。音を立てず低空飛行する黒いドローンはそのまま上昇し、ぼくたちは、息をついて砂浜に戻った。海は空と同じくらい青くてさっきまでの薄灰色の世界には存在しない色だった。あなたは花の形になっている浮き輪をつけて、ばしゃんと海に入り、海を通ってぼくたちは家路についた。海をたどれば家に帰ることができる。浮き輪に手をおいてバタ足して、川をのぼって、そのあいだぼくたちがいる場所はグーグルマップを泳いで、巨大な浮き輪になって移動している。家はぼくの家ではない。マンションだ。初めて二人で暮らしたマンション、夢のなかだけだけれど。黒い飛行機が去ったあとすぐに迫撃砲の連射があつて腹部を撃ち抜かれ「夕飯できたよ」と、妹が呼びに来た。ぼくは「うん」と言つて、ネットブックを、開いたまま、san kaku no suki ma に置き去りにしてベッドを出た。

メディア映像専攻 第1次試験提出資料の返却について

不合格者へ第1次試験時に提出した資料を返却します。

【返却申請期間】

2025年2月4日(火)～2月10日(月)

※但し、2/8(土)・2/9(日)は除く

9:30～12:30／13:30～17:00

【返却方法】

申請窓口：大学院映像研究科事務室

電話：045-650-6201

電話で返却申請があった受験者に対して、

作品・資料を**送料受取人払いにより返送する。**

※「送料受取人払い」は、日本国内限定のサービスとなるため、日本国外への返送はできません。

**上記期間に返却申請のない作品については
本学で廃棄処分します。**